

新 潮 文 庫

女 ご こ ろ

モ ー ム

龍 口 直 太 郎 訳



新 潮 社

Title : UP AT THE VILLA

Author : Somerset Maugham

Originally copyrighted by A. P. Watt & Son

Copyrighted in Japan by Shinchosha through the arrangement with Charles E. Tuttle Company, Inc., Tokyo

おんな
女 ざ ろ

定価 200 円

新潮文庫 赤 130 F

昭和三十五年七月二十五日 発行
昭和五十四年三月十日 二十六刷

訳 者

龍口直太郎
たつのくち ちかお たち

発行者

佐藤 亮一

発行所

株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
くだですが小社通信係担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦 製本・憲專堂製本株式会社

© Naotarō Tatsunokuchi 1960 Printed in Japan

新 潮 文 庫

女　　ご　　こ　　ろ

モ　　ー　　ム
龍 口 直 太 郎 訳

新 潮 社 版

女

ご

こ

ろ

―丘の上の別荘―

1

その別荘は丘の頂にあつた。表がわのテラスからはフローレンスの眺めが素晴らしかった。裏には古い庭があつて、花はほとんどなかったが、立派な樹木が生い茂り、刈り込んだツゲの生垣にかこまれ、草のはえた散歩道や人工的につくった洞窟があつて、その中では涼しい銀鈴のような音をたてて山羊の角から一筋の水が滝となって落ちていた。この屋敷は、十六世紀のころ、とあるフローレンスの貴族の手で建てられたものであるが、その子孫が落ちぶれたために、あるイギリス人に売られ、このイギリス人がまたそれを一時、メアリー・パントンに貸していたのだ。どの部屋も広く、天井が高かったけれども、屋敷ぜんたいとしてはそう大きいほうではなく、彼女は前の持主が残していった三人の召使だけで十分にやって行けたのである。古めかしい家具がいくぶんまばらに置いてあつて、なんとはなしに一種の風格をそなえていた。スチームが入っていなかったためか、三月の末頃、彼女がここに来たときは、まだひどく寒さが身に沁みた。だが、前の持主であるレナード家で浴室を建てましておいてくれたので、住心地のよい家になっていた。今は六月なので、メアリーは、外出しないときには、一日の大部分の時間を、フローレンスの町の円屋根や塔を眺めることのできるテラスか、裏の庭で過ごすのだった。

ここに来てから初めの数週間、彼女は名所見物に多くの時間をついやした。ウフィツィ博物館やバルジェツロ（中世紀に政府機関のあった古い屋敷で、十九世紀の半ばから国立博物館が置かれている）で楽しい朝を送った。彼女は教会堂を訪れたり、古い街通りを別にあてもなく歩いたりした。しかし今では、友だちと昼飯を食べるとか晚餐をとるとかの目的でもなければ、めったにフローレンスの町へはおりにいかなかった。ただ庭の中をぶらぶらしたり、本を読んだりするだけで満足だった。もし外出したいと思えば、むしろフィアト（イタリアの小型自動車の名）に乗って、あたりの田舎を探検するほうが好きだった。あのタスカニーの風景ほど、その気取ったあどけなさのために、魅力的なものはなかったであろう。果樹が花をつけ、ポプラがとつぜん青々とした芽をふき、灰色にくすんだオリヴの常緑の間に、新鮮な色彩をあざやかに浮きたたせる頃になると、彼女は、もう二度と感ずることはないだろうと思っていた、うきうきした気分を感じるのだった。

一年前、彼女の夫が悲劇的な死をとげたあと——夫が湯水のように浪費した財産のうちでいくらかでも残っているものを掻き集めていた弁護士たちが、彼女に面会を求めるような場合には、いつでも手近にいることを必要とした、あの気がかりな数カ月がたったあと、レナード家の人たちが、彼女の神経を休め、これから先の生活をどうしたらよいかゆっくりと考えることのできるようにという思いやりから、この豪壮な古い屋敷を提供してくれたとき、彼女は喜んでその申し出を受け入れたのである。

八年間のぜいたくな生活と、不幸な結婚のあげくに、三十の声をきいた彼女の身に残されたものといえ、いくつかの立派な真珠と、きびしく切りつめてゆけば自分ひとりがどうにか暮らし

ていけるくらいの収入だけだった。だがそれも、初めの様子から見れば悪くはなかった。初め弁護士たちはうかぬ顔で、借金をすっかりはらってしまえば何ひとつ残らないかも知れない、と彼女に宣告したからである。

二カ月半のフロレンスの生活を送ってきた今となれば、彼女には、たとえそのような暗い見透しにたいしてでも、おちついた気持で臨むことができるような気がするのだった。彼女がイギリスを去るとき、古い友達であった老人の弁護士は、彼女の手を軽く叩いてこんなことをいったのであった――

「メアリーさん、もう何も心配することはありませんよ。ただあなたの健康と体力を取りもどしさえすればいいんですから。あなたの容貌についてはなんにもいうことなんかありませんね――それはどんなことにも影響を受けないんですからな。あなたはまだお若いし、とてもおきれいだから、きつともういちど結婚されるにちがいない。しかし、こんどは恋愛結婚なんかなすっちゃいけませんよ。それは間違いのもとですからね。まあ、地位と話相手といったようなものでも目あてにして結婚なさるんですな」

彼女は笑った。苦い経験をしてきたあとなので、そのときには、二度と再び結婚生活の危険をおかす気など毛頭なかったのである。ところが今、あのととき抜け目のない老弁護士が忠告してくれた通りのことを自分がしようと考えているのは不思議だった。それどころか、彼女はほかならぬその日の午後、いよいよ最後の決心をしなければならぬところまで追いこまれてきたようであった。エドガー・スウィフトはもうすでにこの別荘にやってくる途中だった。彼は十五分ばか

り前に電話をかけてきて、自分は不意にカンヌに出向いて、シーフェア卿に会見しなければならぬことになり、すぐにも出発するはずであるが、その前に大急ぎで彼女に会いたい、と申し込んできたのである。シーフェア卿といえば、イギリスのインド大臣だったので、この突然の召喚は、エドガーがいよいよ、多年の宿望であつたインドの要職に就くことをすすめられるということにしかとれなかつた。K・C・S・I（ナイト・コマンドー・オブ・ザ・スター・オブ・インディアの略字でインド星章上級勲爵士のこと）であつたエドガー・スウィフト卿は、彼女の父親と同様に、長い間インドの役人生活を送つてきて、その方面では立派な経歴の持主であつた。これまで北西州の知事を五年もつとめあげ、大不穩の時期にぶつかつても、これを見事に切りぬけてきたのだった。かくて任期を終えたときには、彼はインドにおいて最も才幹のある人間だという評判をかちえたくらいだった。つまり、彼は偉大な行政官としての実を示したのである。決断心に富んでいると同時に如才のないところがあり、断乎としたところがあつても、また一方では、寛大で穩健な人間だった。ヒンズー教徒も、マホメット教徒も、ともに彼には好意を持ち、彼を信頼していた。

メアリイは子供の時分から彼を知っていた。彼女の父が、まだ若くして死に、母親と一緒にイギリスに帰ると、エドガー・スウィフトは休暇で帰国するたび毎に、彼女の家に泊まりこんで暮らすのが例になつていた。ほんの子供の時分には、彼女を無言劇やサーカスに連れてゆき、十代の娘になると、映画とか芝居とかに誘つてくれた。それに彼女の誕生日やクリスマスになると、彼は贈り物を欠かしたことがなかつた。十九のとき、母親はこんなふうに彼女にいった——
「ねえ、メアリイ、もしあたしがあんだだったら、あたしはエドガーにあんまり逢わないように

しますわ。あんたは気がついてるかどうか知らないけど、あの人はあんたのことを思っているのよ」

メアリイは笑った。

「もうお爺ちゃんじゃないの」

「まだ四十三よ」母親の返事はつんとしていた。

だがしかし、それから二年の後、彼女がマシュー・パントンと結婚したとき、エドガーは美しいインドのエメラルドをいくつか贈ってくれた。それから彼女の結婚生活が不幸であることを知ると、彼女にすばらしく親切にしてくれた。知事の任期を終えてロンドンに帰ったとき、彼女がフロレンスに出かけていることを知ると、ほんのかりそめの訪問というつもりでここまでやってきたのである。

ところが、彼がフロレンスにいくと、滞在は何週間もつづいた。彼は彼女に結婚を申し込むのに都合のよいチャノスを待っているのだ——ということがもしわからなかったとすれば、メアリイはよっぽどどうかしているのである。いったい彼はどのくらい長く彼女を恋してきたのであろうか？ 過去をふりかえってみると、それは彼女が十五のときからずっと続いてきたように思われる。休暇で帰国して、もはや彼女は小娘ではなくて、一人前の若い女になっていることを知ったときからである、そんなに長い間、ひたすらに彼女を思いつめてきたということは、なんとなく哀れな感じがした。それはもちろん、十九の娘にたいして四十三の男という場合と、三十の女にたいして五十四の男という場合とは、おのずから違いがあった。もう今では、不釣合とい

う感じがよっぽどうすらいできたのだ。その上、もはや彼は無名のインドの役人ではなかった。すでに重要な人物になっていた。イギリス政府が彼をこのまま遊ばせておくなどと想像するくらいバカげたことはなかったのである。彼がこれから先、次々に重要性をましてくるような職にく運命におかれていることは確実だった。それに、メアリーの母はもう死んでいたのも、彼女には広い世界にだれひとりとして身寄りがなかった。また、エドガーほど好きな人間もいなかったのである。

「ああ、ほんとに決心ができるといいんだけど」そう彼女は独りごとをいった。

もうまもなく、彼がやってくるはずである。あの人を応接間に通したものでかどうか、と彼女は思いまどった。この別荘の応接間といえば、息子のギルランダイオ（父のドメニコ・ギルランダイオは息子のリドルフ・オモ画家だった）の手で描かれたフレスコ壁画のために、また荘重なルネサンス時代の家具と華麗な燭台のために、案内書にまでも出ている有名なものだった。しかし、そこは、あまりにも格式ばった豪華な部屋であったために、このようなところで彼に逢うと、妙にぎこちないかめしさに圧倒されるのではないかと、彼女はおそれたのである。それよりも、むしろテラスで待ったほうがよさそうに思われた。そこは夕暮どき、いつも彼女が腰をかけて、いくら眺めてもあくことを知らない眺望を楽しむところであった。こちらのほうが、わざとらしさが少なくてよさそうに思われた。もし彼がほんとうに彼女に結婚を申し込むというのであれば、そう、大空のもとで、紅茶でも飲みながら、そして彼女がお菓子でもつまんでいる間にそうするほうが、どちらにとっても気が楽なように思われた。この背景なら、その場合に似つかわしく、そう不当にロマン

ティックでもなかった。木鉢に植えたオレンジの樹があるかとおもえば、大理石でできた石棺ヤークコフアグスには、陽気な、あだっぽい花が縁からこぼれるように咲き乱れていた。テラスは古色蒼然とした右の手摺でかこまれていたが、その上には、ところどころに大きな石の花瓶がすえてあり、手摺の両端には、いくぶんすりへったバロック式の聖徒像が飾られていた。

メアリイは長い籐椅子に横になって、女中のニーナにお茶を運んでくるようにといいつけた。もう一つの椅子はエドガーを待っていた。空には一点の雲もなく、はるか眼下に横たわっているフローレンスの町は、六月の午後の、柔らかに澄みきった、輝かしい光線を浴びていた。自動車が丘をのぼってくる音がきこえてきた。次の瞬間には、レナード家の下僕でニーナの旦那だったチーロが、エドガーをテラスに案内してきた。裁断のいい紺サージの服と、黒のホンブルグ帽と、いったいでたちで、背が高くほっそりとしたところは、スポーツマン・タイプでもあり、れっきとした紳士風でもあった。たとえメアリイが初めて会ったにしても、彼がテニスを得意とし、乗馬がうまく、一流の狩猟家であるくらいの見当はついたであろう。帽子をぬぐと、まだほとんど灰色のまざらない黒い捲毛がふさふさとしていた。彼の顔はインドの太陽のため青銅色にやけていたが、頑丈な顎と鷲鼻のせい、か、痩せて見えた。太い眉の下に深く窪んだ褐色の眼は、油断なく光っていた。五十四歳？ いや、いや、彼は四十五歳より一日でも年をとっているようには見えなかった。まだ男ざかりの美男子だった。それに傲岸にわたらない程度の威厳をそなえていた。彼に接した人には、必ず信頼感を起こさせるのだった。どんな苦境に臨んでも当惑することのない男、またどんな事件にぶつかってもおちつきを失うことのない男——それが彼だった。彼

はつまらぬお喋りに時間をムダになどしなかった。

「シーフェアが今朝電話をかけてきて、このぼくにはつきりと、ベンガルの知事にならないかとすすめてきたんですよ。現下の情勢から判断して、新しい人間をイギリスから連れてくるより、すでにあちらの状況をよく呑み込んでいる者を選んだほうがいい、という結論に達したんでしょな——新しい人間だと、ほんとに役に立つまでには、相当勉強しなければならんですからね」

「もちろん、あなたはお引き受けになったんでしょね？」

「もちろんです。それは何よりもぼくが望んでいた職ですから」

「あたし、とてもうれしいわ」

「しかしまだいろいろと相談することがあるんで、ぼくは今晚ミランに赴き、そこからカンヌまで飛行機で行くという手筈になっているんですよ。ここ二日か三日、この土地から離れると思うと、やりきれない気持ちもするんですが、シーフェアがすぐにも会いたいと氣をもんでいるもんですからね」

「それは当然ですわ」

うれしそうな微笑が、しまりのいい、いくぶん唇のうすい彼の口許にただよい、眼はやさしく輝いた。

「ねえ、メアリイさん、ぼくが引き受けようとしている職務はとても重大なものなんですよ。もしぼくがこの仕事をうまくやりとげれば、それこそ、まあ、大変な名誉ということになるでしょうな」

「あなたでしたら、きつとうまくやれますわ」

「それこそ仕事は山ほどあるし、責任も山ほどかぶさってきますよ。だが、それがぼくの好きなことなんです——もちろん、それだけの酬いもありますかね。ペングルの知事といえば、実に威風堂々とした生活ぶりですよ。あなたですから隠さずに申しあげますが、そういったことがなんとなくぼくには魅力なんです。それに住むところは立派な屋敷で、宮殿といってもいいくらいのところなんです。人々をもてなすようなこともずいぶんあるんですよ」

彼女には、この話の方向がどこをめざしているかわかっていた。しかし、そのようなことにはぜんぜん感づいていないみたいに、彼女は唇に、晴れやかな、同情的な微笑を浮かべながら、彼のほうを見やった。彼女は快い興奮をおぼえてきた。

「もちろん、そういった仕事をするには、どうしても妻というものが必要になってくるんですよ」と彼は言葉をつづけた。「こうしたことは、独り者にはなかなかむずかしいもんですからね」それにこたえたときの彼女の眼差は、驚くほど率直だった。

「あなたの豪勢な生活を喜んで共にしたいと思う適任者は、きつとずいぶんたくさんあると思うわ」

「ぼくが三十年近くもインドに生活していて、しかもあなたのおっしゃることに何か意味があるってことぐらいピンと来ないんだったら、それこそよっぽどどうかしていますよ。不運なことに、ぼくがそのようなことをしてもらいたいと夢みている適当な女性は、たった一人しかいないんでしてね」

とうとうやってきた。「イエス」と答えたらよいのか、それとも「ノウ」といったらよいのか？　おやおや、まったく決心をするということは、ずいぶんむずかしいことだ。彼はちょっと、ずるそうな視線を彼女に投げると、こういった――

「ぼくはあなたがまだおかっぱだった時分から、ずっとあなたに首ったけだった――こんなことを申し上げると、あなたはそんなの、初耳だともお思いになりますかしら？」

そこまではつきり切り込んでこられると、なんと答えたらいいものだろうか？　ただ晴れやかに笑ってごまかすほかはなかった。

「まあ、エドガーさんたら、ご冗談ばかり！」

「あなたは今までぼくが見たことのあるうちで最も美しい女^{ひと}だし、また最も魅力的な女性なんです。もちろん、ぼくなどの割り込むチャンスのないことはわかっていました。ぼくはあなたより二十五も年上だったんですからね。あなたのお父さんと同じ年代の人間ですよ。あなたが娘さんだった頃、ぼくのことをおかしな頑固親爺^{おやぢ}くらいにお考えになっていたことも、ちゃんと知っていましたね」

「そんなこと絶対に――」とメアリーは叫んだが、あまり正直なひびきをもっていなかった。

「ともかく、あなたが恋におちたとき、それがあなたと同じ年代の人であったのはきわめて当然の話でした――あなたがいいよ結婚されるという手紙をくださったとき、ぼくはひたすらにあなたの幸福を願った――ということを今申しあげておきますが、どうか信じて頂きたいと思います。ところが、あなたの結婚が幸福ではないということを知ったとき、ぼくはほんとうにみじめ

でしたよ」

「たぶんマティーとあたしは、結婚なんかするには若すぎたんでしょうよ」
（マティーはマジュエーの愛称）

「そのときくらい、ずいぶんたくさんの水が橋の下を流れましたね。どうです、ぼくたち二人の年の違いといったものが、今日でも、その当時と同じように、あなたには重大なものに思われま
すかね？」

それは言葉で答えるにはあまりにもむずかしい問題だったので、メアリイは、自分では何もいわないで、相手にいいただけのことをいわせておいたほうがはるかに賢明だと考えた。

「ねえ、メアリイさん、ぼくはこれまでずっと、自分の軀を健康状態に保つように注意してきたんですよ。ぼくは自分の年齢なんかまったく感じていないんです。ところが、最もいけないことは、年月というものが、あなたに対しては、あなたを一段と美しくさせる以外に、なんの影響もあたえなかったということなんですよ」

彼女はニヤリと笑った。

「エドガーさん、あなたは少しおちつきを失ったんじゃないやなくて？　あなたが——鉄のようなあなた、そんな風になるなんて、まったく思いがけないことだわ」

「ひどいこといいますね。しかしおっしゃる通り、ぼくは少し神経がたかぶっているようなんです。それに鉄のような男とおっしゃいましたが、あなたのお手にかかれれば、このぼくが、てもなくパテの塊りのように、ふにゃふにゃになってしまいうってことぐらい、だれよりもあなたがいちばんよくご存知のはずですよ」